

# Cradle <下>

木住 和

## § 登場人物

### ◆ 三戦士<トリエント>

三ツ橋京

リアンソード・オグニム

ユイファン

### ◆ 王都レックスアーブの人々

シルージャ・イ・モルト

...宰相

ダルト・アン・モルト

...警邏隊隊長

ロイ・ド・モルト

...元千読み。現在旅芸人として放浪中

トルテ・ゲーラ・エストール

...若い千読み

エバ・ステルニア・テレ

...五年ほど家出をしていた第十五代王の一人娘

シス・デステニア・テレ

...第十五代王

フロー

...エバの追従

ノーツェ

...エバの協力者

### ◆ 伝説に残る初代王の人々

エイダ

...初代王

ミネルヴァ

...女神の名。

ルシファー

...悪魔の名。本名ルシファー・ケンツイベル

### ◆ 他の街の人々

スタンラード

...最初の街プリムスの領主

リディア

...二番目の街トワルスディースの領主

ラティウス・ガイ・アズブルロード

...王都の隣街アズブルロードの領主

ラル・キア・アズブルロード

...ラティウスの養子

リンク

...アズブルロード家の庭師

お尻がひりひりと痛い。

今までの道中、ずっと馬車に揺られているだけだった京にとって、これからの旅路は少し酷なものになりそうだった。旅をする人数が王都の前と後で変わったこと、その人たちにとって最適な形で旅ができる準備が為されたこと。それが今に繋がるのだが、京は今、馬の背中にいる。リアンの前に座る格好をとっており、手綱はリアンが掴んでいる。ユイファンは一人で、エバはフローの後ろに特別な鞍を付けて貰って、横を向いて座っている。その先頭を行くのが、白い騎馬にまたが跨ったダルトだ。

もしダルトが抜ければ、馬が三頭で、五人だけで聖域を目指すことになる。馬に乗り慣れているリアンは平気な顔をしているし、ユイファンは騎馬は初めてだと言っていたのだが、すぐに慣れたようだった。フローも手慣れた様子で手綱を掴んでいるし、エバは特別待遇が施されている。ただ一人、馬になれていない京はお尻が痛くて仕方なかった。

馬は時刻も気にせず夜通し歩いたようで、次の街に着いた時刻は陽の六刻、つまりは昼と言うことになる。そう教えてくれたのはダルトだったが、時計を持っているようには見えなかった。何故、時刻がわかるのだろうか。

「街一つより、集落とか村に近いんじゃないか？」

先に馬から下りたリアンが、京が下りるのを補助しながらダルトに言った。

「この先は、ほん殆ど変わりません。確かに、リアンソード殿が言うように、規模が小さい街ばかりです」

ダルトは馬から下りて、周囲を見た。人気はなく、閑散としているが、煙突がある家からは白い煙が上がっていることを見ると、みな昼食を食べている最中だと思われた。

「この街の長のところへ行きましょう」

ダルトはあくまで街と言い張った。しかし、京から見ても村と呼んだ方が合っていると思うくらいに、建物も少なく、あちこちで畑が見えていた。中央の街道だけは石畳になっているが、それも長いこと手入れがされていないようで、ところどころ割れているし、石版が捲れ上がったたりもしていた。馬はそんな石畳よりも、土の方を好んで歩いた。京は、馬から下りて不安定な石版な上を、足元を見ながら歩いた。

「おお、これはこれは。ようこそおいで下さいました」

出迎えたのは、この街の長であるギルエバードという名の老人だった。長い白髪、長い髭に覆われたその顔は、長老と呼ぶに相応しく見えた。要するに、京の中にある典型的な仙人のイメージにぴったりと当てはまったのだ。紺のさむえ作務衣を着せたら完璧である。

「ギル、変わりはないようだな」

ダルトがねぎら労うように言うと、ギルエバードは片眉を上げた。

「ええ、まあ御覧の通りです。王が崩御為されたから変わりはないですよ。……いつまで続くのやら」

最後の一言はまるで独り言のように、ぼそりと呟いた。ダルトはそれに気付いてか気付かずか

、世辞の挨拶を一通り済ませた。その後、ギルエバードは決して広くはない離れへと六人を案内した。木造で質素なその建物を見て、京はどことなく懐かしんだ。日本の田舎にありそうな母屋に近い。ただ、そこにあっても良さそうな庭がないのが寂しい。

ギルエバードが乾燥菓子を持ってきたときには、全員寛いでいた。まだ、レックスアーブを出て、そんな時間は経っていないが、少し疲れてはいた。そのところへの甘いお菓子は、誰もが喜んだ。

「初めて見ましたわ」

食べる前に、エバが言った。ギルエバードがエバをちらりと見た。

トリエント  
「三戦士の方ですか？」

「いや、」ダルトが答えた。「城からの追従が私を含め三人。三戦士はこちらだ」

エバが王女であるというのは他の者には悟られないようにする、というのが城を出る前にシルージャから言われた注意の1つだった。追従と言われたエバとフローからふい、と視線をそらし、ダルトが示した三人を見てギルエバードは片眉を上げた。京は、それがこの老人の癖らしい、と思った。乾燥菓子に手を伸ばす。

「ほうほう、こちらが。……して、神の声は聞こえますかな？」

京は、口に含んだ菓子を思わず吐き出しそうになって咽むせた。

「ギル、尚早というものだぞ！」

ダルトは叱咤したが、それをエバが手を広げて制す。

「勘違いなされてますわ、ご老人。神の声を何処でも聞けるのは王だけ。如何いかに三戦士といえど、神の御許みもとまで行かねば、聞くことができませんのよ」

ギルエバードはまた、片眉を上げた。

「……左様でございますか。しかしね、いつまでも日照り続きじゃ、この街はもう駄目だ……。王でも神でも、誰だって良い。雨さえ降れば、どうだって良いのですよ。この菓子だってねえ、保存が効くように家内が考えたものなんです。それでも、蓄えはない。この街は限界だ」ギルエバードは下を向いたまま話した。「ホントはねえ、アンタ方にはすぐに出てって貰いたい。それくらい、限界なんですよ」

ダルトが立ち上がろうとするのを、またエバが制した。

「わかってますわ、ご老人。わたくしたちは、一休みさせていただければ良いだけです」

ギルエバードが下がってから、誰も菓子に手を付けなくなった。

こんなに、直接的に歓迎されなかったのは初めてで、京は少なからずショックを受けていた。「ねえ、」京はエバに向かって話しかけた。ダルトはすぐにいきり立つから怖い。「雨、暫く降ってないの？」

「そうね、王が崩御してからはずっと降ってないんじゃないかしら」

「どうして？関係があるの？」

天候は、天の営み。普通ならば、人がどうこうできるものではない。それなのに、ギルエバードのあの様子を見ると、まるで王が天候を支配しているような口ぶりだった。

「王は、神の声を聞くわ。それはつまり、神と喋れる、とすることなの。おわかり？」

当然じゃないか、と思って京はこくりと頷いた。気付けば、リアンとユイファンもエバの話に耳を傾けているようだった。エバは、皆を見て言った。

「神はこの世界を造った。しかし、管理しきれなかった。見えぬところの<sup>ほつ</sup>解れ、神では補えない穴。そういったものを神の代わりに管理する者、それが王よ。つまりね、王は神にはわからないことを代わりに引き受けているの。その仕事の一つが、天候。神は、天気の良い悪いがわからないのね。人は穀物を作り、それを食べて生活をする。その為に天候は重要だわ。だから、雨季を、乾季を設けたい。それを、育てる穀物などで雨季を調整する。そういう仕事があるのよ」

「おかしかねーか？」リアンが右手を挙げて発言した。「世界が管理しきれないのは王も同じだろう。大体、『雨降らせてくれ』って頼んだら降るって言うのもおかしな話だ」

「オグニムの一つ目の疑問は答えられるわ。それは<sup>あまよ</sup>天読みが解決してくれるの。各街にいる、重要なお役目よ。読み手と言って、千読み、<sup>こくよ</sup>刻読み、天読みの三役はクレイドルでは重役なの」

「刻読みというのは、初めて聞いたな」

ユイファンが呟くように言った。

「刻読みは、時間を管理している人たちよ。この人たちも各街にいて、時間を知らせるの。この街に来たとき、鐘の音を聞かなかった？一日に四度、鐘が鳴るのよ。陽の零刻と六刻、陰の零刻と三刻」

エバが言う陽の零刻というのは、起床の時間を指す。京も確かに、寝ぼけてはいたが起床時刻頃に良く鐘の音を聞いた。陰の零刻は夕飯時、三刻は就寝時間を指すのだが、この世界の就寝時間は中学生の京から見ても、かなり早いと感じる。なにせ、陰の三刻から陽の零刻まで、数えるとそれは九刻、京の感覚では八時間か九時間に近い。普通だったら、夜更かししたい子どもがいてもおかしくはなさそうだが、アズブルロードのラルはしっかりこの時間を守っていた。この、日に四度の鐘だけが、彼らの唯一の時計なのだから、律儀に守るのもわからないではない。刻読みは、生活に密着した、本当に大事な役割と言える。

「この天読みと刻読みは、人々の生活に欠かせないのよ。でも、天読みはその土地の収穫物や雨量を記録して、王に雨季を進言するのが役割であるから、読み手の中でも重要度は一番下ね。今、失業中できつと困ってるわ」

「雨は本当に、神頼みしなきゃ降らないのかよ？待ってりゃ、降るんじゃないのか？」

「降らないわ」エバが首を振る。長い髪がそれにつられて揺れた。「父上も、そのことは始め、不思議に思っていたのよ。わたくしは、産まれたときからクレイドルのそういった制度を当然のものとして受けとめていたから、父上の仰ることは一部わからないことがあるけれども。…  
…まあ、このことも我が研究所で目下、研究中よ」

エバはたまに、研究所という言葉を出す。聞くところによると、エバの父である十五代王はクレイドルの変わった体制を不思議に思って研究所を設立したそうで、エバが成人すると、エバ自身もその研究に没頭し始めたそうだ。今では、その王立研究所をエバが管理しているらしい。肩書きの上では、エバが王立研究所の所長なのだ。

「それじゃあ、この街だけじゃなくて他の街もずっと雨が降ってないの？」

「そうね、」エバがダルトを見ると、ダルトはゆっくり頷いた。「城をずっと出てたから、各地のことはわからないけど、ここ最近、雨が降った記憶はないわ」

「じゃあ、農作物なんかは被害直撃だな。王城に、保管庫があるんだろう？蓄えは大丈夫なのか？」

「その点、心配いりません」

ダルトがびしゃりと言った。

「レックスアープは、ね」エバがそれに一言付け足す。「蓄えがないのは他の街よ。危機意識が高い街は大丈夫だろうけど。プリムスは近くに泉もあるから、いざとなったらそこから田畑に水を引けるの。だから飢えの心配は無し。アズブルロードも商業で発展した街だから、食物に関しては問題ないわ。問題は王都の北よ。北はほとんど農作と酪農で生活している田舎と聞くわ。蓄えはたかが知れているし、何よりこの水不足。史実書にも、王崩御時の北の荒れようは非道いと記されている」そこで、エバは目を細めた。「——堪えきれなくなった民衆が、反乱を起こすとか、山賊になるとか」

「反乱、山賊——成る程なあ」リアンは両手を頭の後ろで組んだ。「だから、南側に難民が溢れるってわけか」

京はただ頷いた。良くはわからない。だけれど、王がいなくというだけで荒れる世界の事実はただそこに存在している。リアンもユイファンも、心なしか納得はしていないような顔だった。それは今までだってずっとそうだったが、ここに来て違うのは、王不在で荒れるのはおかしいという反論をしないところだ。三人とも、納得はできずとも、それを事実として捉えつつあった。——この世界は、王がいないと成り立たない。

機能しない、と言うのならわかる。まとめ役がいなくというのは混乱を招く。しかし、世界自体が成り立たなくなると言うのは実感として乏しい。普通の世界であつたら、王がいなくて混乱するなら、その場にいる人の中で才気ある人が先に立つ。歴史の中で、それは繰り返された。この世界は、次の王は神が決めるというのだから、率先して先導しようとする人がいないのだ。自主的に、王にはなれない。だから放っておくと、この世界は破滅するのだ。王がいなく成り立たない。三戦士がいなく王は決まらない。なんとも回りくどい仕組みである。どうしてそんな仕組みにしたのか、京はそれを神に問いたいと思った。叶うならば、神と面会ができるのだから、聞くことを考えておいても損はないだろう。

さて、と言ってダルトが片膝を立てた。

「エバ様、ご出立なされますか？」

「そうね」エバが右手を頬に当てて答えた。「アン・モルト、ご苦労だったわね」

申し訳ありません、とダルトは頭を下げた。「本来なら、エバ様を守り通してこそこの護衛。ここまでしかお供できなくて、心苦しい限りです」

エバは一瞬、眉を<sup>ひそ</sup>顰めた。エバは知っている。

家臣が皆、エバを手間の掛かる王女だと思っていることを。

家臣が皆、エバの目の届かないところで溜め息をつき、王女の側を離れると安堵しているこ

とを。

昔は、その不満を周りに当たり散らして、更に家臣を困らせていた。だが今では、その不満を心の奥底に仕舞っておける。ずっと、奥深くに仕舞って、表には出さない。エバは微笑んだ。

「構わないのよ。護衛団も警邏<sup>けいら</sup>隊も、忙しいのでしょうか？わたくしなら平気よ。フローがいるわ」

フローはこくりと頷いた。それでも困ったようにしているダルトを見て、リアンが続けた。

「さっき話してた民衆の反乱やら山賊やらを気にしてるなら心配ないぜ？俺だって、自国じゃ腕利きの騎士だ。ユイだって、良くは知らねえけど、ちっとは腕は立つんだろう？」

それまで黙って腕を組んでいたユイファンが少し顔を上げた。

「お前より遙かにな」

相変わらずの減らず口だな、とリアンが舌打ちをした。「ってことは、お守りはエバと京だ。守れない人数じゃないだろう」

「……そうでしたな。クレイドルを救う三戦士の力、信じております」

京は、ダルトにまでそう言われるとは思っていなかったから、思わず顔をしかめた。リアンは平気な顔をして請け負っていた。京には真似ができない。

ダルトがギルエバードに一声掛けると、挨拶もそこそこに、追い出されるかのようにその家を出た。街道はまだ、ずっと北に伸びている。ガタガタになった石畳、それはこの街を出たところで途切れていた。そこから先は、轍<sup>わだち</sup>道だ。ダルトがその石畳の切れ目で、深々と頭を下げた。京たちは、また馬に跨ってその街を出た。ほんの、一刻の休憩だった。

「うう～」

唸り声を上げる京に、リアンは我慢しろとだけ言った。

どうも騎馬に慣れない。馬の上下するリズムに乗れば、大丈夫だとリアンは言ったが、それができないので困っている。尾骶骨が痛かった。

次の街（村と言った方が的確だ、とエバは言っていた）に着くのはまだまだ先のようなのである。街を出てから北側は畑や田んぼが広がっていた。それも暫くすると無くなるのだという。途中で雑木林があるのだそうだ。それを越えて、山の麓を目指す。そこに酪農を営む街がある。そこまで二、三日はかかりそうだとするから、途中で野宿を余儀なくされる。京たちは、レックスアープまで野宿を何度か経験しているが、エバはどうなのだろう。お姫様はそんなことしない、という京の不安を余所<sup>よそ</sup>に、野宿しなければならないと言い出したのはエバだった。

「そろそろ、ご飯時ね。野宿ができそうなところで馬を停めましょう」

「時間がわかるの？」

エバが説明したような鐘の音は、街から遠く離れた今は聞こえない。京は疑問に思って聞いたが、完璧な笑顔と共に返ってきた答はこうだった。

「あら、だってお腹が空いたでしょう？」

一言で言えば、動物的勘に他ならない。つまり、根拠はないのだ。

とにかく、野宿をすとなれば、寝ることができる木陰が望ましい。レックスアープまでは馬

車を使っていたから、適当なところで馬車を止め、その中で寝ていた。今はそんなことができないから、場所は選ばなければならない。それだけでも時間が掛かりそうだった。なにしろ、今は見渡す限りの荒野だからだ。それでも轍があるということは、北の街はそれなりに街同士で交流を行っている証拠である。

「見えた」そう呟いたのユイファンだった。「林だ」

ユイファンは道のずっと先を見ている。京もそちらに目を凝らすのが、はっきりと見えるわけではない。言われれば、そうだと言えるくらい、微かに緑が見える。京はかけていた眼鏡を外して、服の裾で拭いた。あまり変わりはない。

程なくして、ユイファンが言った通りの林が見えた。その頃にはあれた道の周辺に草花が生えているのが見えた。どうやら、事前の説明にあった『次の街に行くまでに通る雑木林』にたどり着いたようである。野宿場所は、この林の中で適当なところを探そうとエバが言い、エバを乗せたフローの馬が先に林の中へ入っていった。林にはいると、陽の光が届きにくくなる。それでも明るいために林の奥深くへと進んでいった。先導はフローの馬、続いてリアン、ユイファンの順である。木の根が張りだしているところは不適切、平らで、軟らかい土があり、落ち葉をしいて寝床にできる、そんな場所を探すことになった。そうすると、道を外れたところも探すため、京は馬から下りた。

そのときだった――。

京の目の前を何かがよぎった。京が感じたのは、頬を撫でた、その風圧。その何かは見えないくらいに近くを高速でよぎったのだ。ドスツと低い音が左手に聞こえ、そちらを見ると、木の幹に突き刺さって揺れる矢があった。京は、今よぎったものがそれだと、すぐには理解ができなかった。

それが合図であったように、次々と矢が降ってきた。

だが幸運にも、それらの矢は京たちには当たらなかった。林の中であるため、周囲の木々に矢の進路が阻まれているのだ。しかしその中で、馬が一頭 <sup>いなな</sup> 嘶く。ユイファンが乗っていた馬だ。後ろ足で、そり立ち上がった馬の手綱をユイファンが引くが、後ろ足に刺さった矢をふりほどくようにして馬は暴れた。その馬が京の方に来たのだから、咄嗟に避けようとして、木の根に躓いた。

転び、そこを誰かに引っ張られて立ち上がろうとすると、その足は宙を蹴った。あれ、と思う間もなく、京の視界は反転する。逆さまになったリアンとユイファン、それにエバとフローが見えた。誰かに担がれてる、と気付いたときには、彼らの姿が遠ざかっていく。

京は声すら出せなかった。



「畜生ッ！」

リアンは腰に帯びていた剣を鞘から引き抜いた。

金属が<sup>こす</sup>擦れる心地よい音がして、その洗練された刀身があらわになる。それを振り、飛来する矢を防いだ。その後ろで、ユイファンの馬が<sup>な</sup>啼いた。その声に、リアンは首を少し背後に向ける。京が身を引き、転んだのが視界の端に写った。だが、リアンの目はそれよりも前方にあるものを捕らえていた。黒い服装に、同じ黒い布で顔を隠した奴が現れ、瞬く間に京を攫っていった。追おうとするリアンは、馬の頭をそちらに向けるが、暴れるユイファンの騎馬に邪魔をされて追えなかった。

「ユイ、馬を捨てろ！」

まるでそのリアンの台詞が合図であったかのように、京を攫ったヤツと同じ格好をした集団が木の陰から次々と現れた。その手には、剣や槍が握られている。もう、矢は降ってこなかった。その黒装束たちが、リアンとユイファンを取り囲んだ。リアンがちらりとエバの方を見ると、エバとフローが乗る馬は無事で、そちらは包囲にあっていない。狙いは<sup>トリエント</sup>三戦士か、とリアンは舌打ちをした。

捨てると言ったのに、暴れる馬にしがみついたユイファンは狙われる格好の的となった。リアンはもともと訓練で、騎馬での闘いを経験している。馬の上から、要領よく黒装束の攻撃を弾いた。だが、馬に乗るリアンには槍など、柄の長い武器を持った黒装束が取り囲み、包囲を突破するのは中々難しかった。多勢に無勢、敵は元より地の利を得て、計画を立てて襲ってきている。迷うことなく、京を攫ったのがその証拠だ。林に入る前は見渡す限りの荒野、つけられていたとは到底思えない。だとしたら待ち伏せ。

（一体どうして？）

リアンの思考はそこから先に進まなかった。敵はなおも襲ってくる。リアンはそれをいなすので精一杯だった。

\* \* \*

フローはその鈍い頭で考えていた。

そう、自分の頭を鈍いと思っている。考えが及ばないこともそうだが、何より思考の瞬発力がないことを自覚していた。その頭で今、二つの事柄が天秤に乗っている。

——この場で賊を撃退するか、京を追うか。

ユイファンは慣れない馬が急に暴れ出したことで驚いているし、リアンは敵に包囲されて身動きができない。そうしている間に、京の姿は林の向こうへと消えてしまった。追いかけるなら、早い方が良く。そして今、追いかけるのとしたらそれはフローだ。だがその為には、馬を置いて足で追いかけるのが良策である。賊は木が密集する林を縫うように走っていったのだから、馬では追えない。そうすると、エバを残していくことになる。それは避けたいことだった。

頭の中で、天秤がゆらゆら揺れる。決まらない。

そういうとき、決断を下すのはエバだった。

「追いなさい」

<sup>きぜん</sup>毅然とした声で言うエバを、フローは振り返る。不安な顔をして見せた。

「わたくしなら、大丈夫。それよりもケイが危ないわ。追いなさい」

主にそう言われれば、そうする他無い。それに、狙いは三戦士なのだ。きっと、大丈夫。

フローは自分にそう言い聞かせて、頷いた。賊を迎撃しているリアンを見る。余裕など無いだろうに、フローの視線に気付いた。頷くでもなく、フローの視線を受け止める。それだけ。それだけで、フローは伝わったと思った。

——エバ様を宜しく。

心の中でそう呟いて、馬から下りた。替わってエバが前を向き、手綱を握る。フローは腰を落として身体を低くした。そして、地を蹴って走り出す。リアンやユイファンを襲っていた賊がそれに気付いたが、向かう方向が逆であること、そしてフローの足が速いことで、結局賊は誰もついてこなかった。

フローは獣のごとく走り出す。それは、一瞬のことだった。

\* \* \*

ユイファンは、混乱していた。

いきなり矢が降ってきた。しかしそれは、自分には当たらないと思って何もしなかったら、どうやら馬に当たったらしい。負傷した馬は急に<sup>いなな</sup>嘶き、ユイファンは放り出されそうになった。反射的に、しがみつく。すると次は、黒装束が襲ってきた。暴れる馬の上では応戦できない。なんとか攻撃を避けたつもりでも、それは馬に当たる。途中でリアンが馬を捨てろと言ったが、そんなことができないくらいに馬が暴れる。できたらやってる、と怒鳴ってやりたくても、それすらできない。が、次第に馬が弱っていった。もう、跳ねる力がなくなったようで、ただひたすら身を振る。これなら、とユイファンは馬の背から飛び降りた。地面に着地する際、身体を丸めて横転する。そうすることで、賊の追撃を避けた。膝を立て、立ち上がるときにはもう、腰<sup>エモノ</sup>の武器を抜いて応戦していた。

こういう修羅場には慣れている。

ユイファンは手中の武器——<sup>サンタオジエン</sup>三条剣をぐるりと回した。剣と言うよりは太い針が三叉になったそれは、ユイファンの愛剣だ。幾度となく襲う修羅場を、ユイファンはそれ一本で今まで乗り越えてきた。馬の背から離れ、ユイファンを煩わすものはもう無い。

にやりと不敵な笑みを浮かべて、三条剣を構えた。

\* \* \*

驚いたことに、みるみる敵の数が減っていった。それを、馬上からリアンは見た。

馬から離れた後のユイファンは圧倒的だった。手中に収めた武器で、的確に相手の急所突く無駄のない戦法は、驚嘆に値する。一対一での訓練ばかりやっていたリアンより、多勢対一にユ

イファンは慣れているようであった。動きも速い。素早く背後に回って一撃。それだけで敵は膝を突く。

それに気付いた他の賊は、リアンよりもユイファンを警戒し始めた。リアンはなおも馬上から敵の攻撃をなぎ払うが、数を減らすほどではない。思わず、ユイファンの戦い方に圧倒され、魅入ってしまった。こんな奴がいるのか、と言う驚きがまず一番である。段々冷静になると、ユイファンの使う武器が目にとまった。三叉の錐のような武器。それでただ急所を突くだけだから、ユイファンは血に汚れることはない。綺麗な戦い方、と言ったらこれがそうなのだろう。そして、リアンは思った。

——あれは、暗剣……。

暗殺に使う武器をそう呼ぶ。ただ、リアンの国には暗殺者などほとんどいないから、そういう武器があったという話と挿絵を見ただけだ。リアンが見聞きした暗剣は、三叉ではなく、ただ一本の針の形だったり、短刀だったり、投剣だったりした。実際、そちらの方が使いやすいただろう。正確に急所を突けるのなら、あとの二本は余計だ。だとしても、その形状はやはり暗殺目的のものようだ。

ユイファンは暗殺者なのか、と疑問に思うと同時に、何故かそれが一番ユイファンに適職じゃないか、とも思った。

あっという間に、敵の数は減った。倒れている者、<sup>うずくま</sup>蹲る者、身を引いて様子を見る者、まだ立ち向かう者。そこに立っているのは、屈強で本当に技量のある強者だけとなっていた。ここまで減れば、リアンもなんとかなる。京のことは、追っていったフローに任せているのだから、今自分がここで守る者と言え、王女エバだ。

そう思って振り向いた先に、エバの姿はなかった。馬がだけがそこに残され、肝心のエバがそこにはいなかったのだ。

——やられた……ッ！

狙いは、三戦士と見せかけたエバだったのかもしれない。しかし、もう遅い。

リアンはとにかく、賊を一人でも生かして捕らえようと動き出した。その様子に気付いたのだろう。賊の一人、大柄な黒装束が、口を覆う布を下ろして口笛を吹いた。すると、途端に賊は身を引く。負傷した者も、怪我を負っていない者が手を貸してその場を去ろうとする。それを追おうとしても、屈強な者たちが壁となってそうはさせない。結局、黒装束は、死した者を除いてその場を去った。去り際に手際よく、煙幕を使って逃げた。本当に用意周到だ、と舌を巻く。なんのついでか、鼻が曲がるような匂い玉まで、その場で使って逃げていった。

リアンはもう追う気力が無くなっていた。

\* \* \*

フローは口を覆っているスカーフに手を掛けた。その覆いを下ろして、鼻が効くようにする。僅かだが、人間くさい匂いが残っていて、それをフローは辿っていた。

鼻は、犬並みに効く。それをエバは知っていたからこそ、京を追うようにフローに命じたのだ

。姿が見えなくなった以上、このような方法で追うしかない。それに、フローは足が速い。暫く走ると、黒装束の後ろ姿が見えた。ちょうど、ぐったりしている京を肩の上に担いで走っている。木々が一旦切れ、道に出ようと言うところだった。まだ林の中ではあるが、街道とはまた別の道のようなものである。轍はなく、ただ人が踏みならしてできただけの道に見えた。そこに、他の黒装束もいる。馬も数頭、どうやらここが合流地点のようだった。

馬を撫でながら、待っていた黒装束が走り迫るフローの存在に気づき、凄まじい形相でフローを指さして何やら叫んだ。京を担いで走る黒装束は、ちらりとフローを見てその距離の近さにぎょっとしていた。フローは、黒装束と五歩くらいの距離まで詰めていた。

あと数歩、地を蹴れば追いつく。

それを飛来した投剣が防いだ。あの凄まじい形相で叫んでいた黒装束が投げたのだ。それを軽く躲したフローだが、そのために距離を詰めることができなかった。黒装束が馬に近づき、そこで京を乗せようとするが、焦ってうまくいかない。フローはその隙に黒装束に詰め寄った。相手が振り向く隙も与えずに、首筋を手刀で強打した。その黒装束が、膝から崩れるようにして倒れた。と同時に、その支えを失った京も地面に落ちようとする。そこをフローは受け止めた。京を見る。気を失ってはいるが、息もしているし怪我もないようだった。ホッとするのも束の間、もう一人がまた投剣を投げた。それを後ろに跳んで躲した。投げられた投剣はフローが先程立っていた地面に突き刺さる。それがまた飛来して、フローは更に後方へ跳んだ。京を抱えたままでは、両手が塞がって対応ができない。幸い、敵は今一人だ。次々に跳んでくる投剣を後方に跳ぶことで回避した。それが連続してフローの足下ばかり狙うのだから、流石におかしいと感じた。大きな木の幹に身を隠して、その根本に京を下ろした。これで、応戦できる。

だいぶ、黒装束との距離は空いてしまったが、一気に詰め寄れば問題ない。問題は、木の陰から出る瞬間だ。そこを狙われたらひとたまりもない。フローは首元のスカーフを外した。それを風に乗せて放すと同時に、反対側から飛び出して、黒装束目掛け走った。投剣使いの黒装束は、倒れたもう一人に寄り添っていた。投剣がスカーフを射貫くその隙に、フローは一気に距離を縮める。しかし――、

「?!」

目の前を急に煙が覆った。

煙幕だ、と思ったときにはつい足を止めてしまっていた。続いて、刺激臭がフローを襲う。煙だけなら気にせず黒装束を追えた。しかし、この刺激臭は鼻の効くフローにとって、身悶えするような効果の高い攻撃だった。思わず鼻をつまんでうめいた。ついでに、涙まで出る。その臭いから遠ざかるようにして、フローは京を寝かせた木の根元まで戻った。その途中、剣で木の幹に貼り付けられたスカーフを取り戻して、顔の下半分をそれで覆った。それでも臭いがフローを襲う。とにかくその臭いから逃げた。

京は、空腹から目を覚ました。

気付けば、木陰の中、木の根元のちょうど良い窪みに寝かされていた。

(……あれ、僕は…?)

ぐわんぐわんする頭に手を置いて、京は状況確認のために、あたりを見渡した。向かいの木の根元にはフローが俯いた姿勢で座っている。それ以外は、ここが林の中だと言うことしかわからない。街道は、近くには見えない。他に誰もいない。

そうだ、と思い出す。

黒装束に攫われて、混乱する内に気を失ったと言うところまで、何とか思い出せた。それと今の状況を結びつけて、京は自分がフローに助けられたのだと知った。しかし、他のみんながいないのはどういうことだろう。京が頭を捻って考えていると、フローが頭をすっと上げ、京を見据えた。心なしか、スカーフで鼻から下をきつく縛っているように見えた。それを見て、京はフローが喋れないことを思い出す。口元は常にスカーフで覆われているから見たこと無いが、フローは喋らないのだと、エバもシルージャも言っていた。さて、どうやって意思の疎通を図ろうか。京は考えるよりもまず言葉が先に出ていた。

「あ、ありがとう。助けてくれたんでしょ？」

聞くとフローはこくりと頷いた。

「あの……、みんなは？もしかしてはぐれちゃった？」

これにもフローは先程と同じ調子で頷いた。

「あ、ごめん。それって僕の<sup>せい</sup>所為だよな……」

京は俯いた。きっとフローは頷くだろうと思った。それを、見たくはなかった。しかし、フローは頷くことはしなかった。ふるふると首を振っている。京がそれを見て首を傾げると、また首を振った。

早速、意思の疎通ができなくなってしまった。京は困った。普通なら筆談といきたいところだが、この世界の文字が違うことはもうわかっている。筆談はできない。どうしよう。京が困っていると、それをわかったのかかわかっていないのか、フローは急に立ち上がって、京の側でしゃがんだ。そっと、京の頭に手を乗せる。慰められているのか、と思った。そう言う仕草に思えたのだ。大人が泣く子をあやすときに頭をそっと撫でてやる。それと同じように、フローは優しく手を置いたのだ。そして、空を見上げる。今は木の枝が青空を隠していたが、所々の木漏れ日がとても綺麗だ。フローはその光を見つめていた。その視線の先は、太陽の方角。そしてフローは口を覆うスカーフに指をかけ、下ろした。綺麗な口元が露わになる。その薄紅色の唇が、ゆっくり動いた。

「非常事態につき、喋ることを許していただきたい」

ハスキーな女性の声。

京は驚くと同時にどきりとした。女性らしさを感じさせない風貌から、今までフローが女性であると意識したことがなかったのだ。フローが視線を戻し、また京を見た。

「貴方も、私が喋ったことをどうかエバには言わないで下さい」

「え……」

どうしてと聞くより、そのしっかりした力強い物言いに、京は思わず頷いた。  
「申し訳ない、先に謝っておきます。他の方たちと、はぐれました。それは貴方の所為ではなく、私の所為です」

「え、いや、でも、攫われちゃった僕が元はと言えはいけないんだし」

「それは、肯定しがたいです」フローは真面目な顔で言った。「でも、他の方たちと早く合流しなければいけません。これから歩きます。歩けますか？」

うん、と言って京は立ち上がった。お腹が空いたなんて、とても言い出せなかった。

\* \* \*

リアンは呆然としていた。

気付けば、ユイファンと二人で林の中に取り残されたのである。

賊の狙いは<sup>トリエント</sup>三戦士、と見せかけて実は王女エバだった——のかもしれない。実際には京も攫われているから、奴らの目的は明白ではない。

とにもかくにも、リアンとユイファンは残された。生きている者は、それだけだ。黒装束の死体はいくらか転がっている。それは全て、ユイファンが殺った。苦しんだ様子はなく、出血はほとんど無いから、遠目には地べたに寝ころんでいるようにしか見えない。その黒装束よりもユイファンが乗っていた馬の方が重傷に見える。あちこちから血を流し、今は息も絶え絶えになって蹲っている。そう、長くは持たないだろう。

リアンは途方に暮れた。

右も左もわからない異世界で、取り残された。しかも、王女を攫われるという大失態までしたのだ。故郷では王女の警護まで任されるようになった騎士であるリアンにとって、それは重くのしかかる。たとえ、自分にとっての王女でなくとも、だ。責任を感じる。

本来なら早急に、城に知らせるべき重大な事柄だ。だれけれど、今ここでレックスアープに引き返すことは善策と言えるのだろうか。

「ユイ、どうする？」

ユイファンを振り返って、リアンは聞いた。ユイファンは瀕死になった馬に構うことなく、先程までエバが乗っていた馬の手綱を握った。そこに乗っている豪華な鞍だけ、取り替える。

「先に進むまでだ」

「ケイやエバは、見捨てていくのか？」

「見捨てる？」ユイファンは聞き返した。「あいつらは他人だ。それに、もうくたばってるかもしれないあいつらを、闇雲に探し回った挙げ句、俺が死ぬのは御免だ。そんな義理はない」

「おまえ……」

ユイファンは冷たい人間だと思っていた。今までの言動で、そういう人物だとリアンは判断していた。だが、ここまで冷酷になれるヤツだとは思っていなかった。短い付き合いだけれど、京は同じ異世界人で、このクレイドルでは仲間だ。責めて、京だけでも安否を心配するくらいの間柄になっていると思っていたのだ。それをいともあっさり、他人という一言で切り捨てる。激高

したいのを通り越して、リアンの心は冷めていった。

「そうかよ、それでいいのかよ、お前は」リアンは力なく呟いた。「ケイが生きてて、助けを待っているとか、思わないのかよ。エバだって、そうだ」

「そんなのはお前の勝手な思い込みだろ」

———そんなのは、君のエゴだろう？

リアンはそのとき、クレイドルに来る前のことを思い出していた。気心の知れた友フィルとの喧嘩。確かにフィルは、そう言ったのだ。

———だって、ルイの為だろうがッ！

———そんなのは、君のエゴだろう？ルイは何も言っちゃいないよ。人の気持ちを汲むのは良いけど、間違った、それも自分に都合の良い解釈しかできないのだったら、それはただのお節介だよ。

リアンは、フィルとよく喧嘩をする。周囲も、いつもの口げんかが始まったと苦笑混じりに見ていただろう。だが、リアンはその言葉に逆上した。まるで、お前は何もわかっていない、と言われてるように聞こえた。フィルの言葉をそう捕らえてしまった時点で、リアンは保身的で利己主義なのだろう。だけれど、リアンはそれを認めたくなかった。

———俺の何が間違ってるって言うんだ…ッ！

そう怒鳴って、リアンは城を抜け出した。周りがリアンを止めることなく、呆気にとられていたのは、リアンがフィルを殴ったからだった。みなが派手に倒れたフィルの元へと駆け寄る。決定的だった。リアンはそれを確認してしまった。

(俺は———、ここにいなくても構わない人間だ)

ユイファンの言葉が、そのときのことを思い出させる。フィルとは全く違う人種のくせに、フィルと同じようなことを言った。それにリアンは驚愕していた。

「ユイ、お前……ッ！」

あの時と同じように、逆上しかけたリアンを前に、ユイファンが真っ直ぐリアンを向いていた。

「聞かす、それならこれから俺たちはどうすべきなんだ？」

「どうって……」

改めて問われると、リアンは言葉が出てこないことに驚いた。

(ケイを助けに行くんだろう？エバを追うんだろう？)

頭の中ではそう言うくせに、実際に口が動かない。

(何処に行ったかもわからないのに、どうやって助けるって言うんだ！)

所詮は騎士を気取っていただけなのだろうか。腰の剣は何のためにある？

「エバは、王女じゃない」馬に乗って手綱を握ったユイファンが言った。リアンは位置的に、ユイファンを見上げた。「前の王はいない。あいつはもう王女じゃない。そのようなことを、城で言っていたら」

それは確かに、ユイファンの言う通りだった。しかし、肩書きがどうあれ、心情的に見捨てる

というのは気分が良くなかった。リアンが俯くと、ユイファンは続けざまに言葉を浴びせた。「王が必要なんだろう？あちこちで荒れた街を見た。それをどうにかするために王が要る。その王を探すために俺たちは呼ばれた。仕事はそれだけだ。ここで、ケイやエバを捜し回って、結果として俺たちが人知れずくたばったら、この世界の王は不在のまま。雨は降らないし、街は荒れる」

千のために、一を犠牲にする。

それは王たる者の、責任であり、決断である。リアンは戦士隊に入った直後の研修で王政学を学んだ。そのときに聞いた言葉である。そのときは、<sup>あくび</sup>欠伸をかみ殺しながらの聴講だった。下らない、と思った。一すら守れないのが、王位に就くのか？それこそ国が傾く。そう思ったのだ。だが、実際にリアンは今その選択を迫られている。

千を守るか、一を守るか。

心情的には一をとる。しかし、ユイファンの言っていることが正しいのは、リアンには痛いほどわかっていた。伊達に戦士隊副隊長をやっていない。リアンは国を守る立場の者だ。もう、犠牲を払う覚悟はとっくにできていたはずだ。

リアンは顔を上げた。

納得したわけではないが。

「今日は、珍しく良く喋るじゃねーか」

「お前が喋らないからだろう」

リアンは馬に跨った。二人は街道を進んだ。北に向かって。

道中、運良く京たちに合流できればいい。賊は待ち伏せしていたのだ。南に行ったと言うことはあるまい。ならば、この先で会える可能性を信じて。目指す場所是一緒なのだから。

\* \* \*

「思った以上に、手際が良かったわ」

そう言われて、ノーツエは嬉しさのあまり、顔が紅潮した。それをエバに見られなかったのは幸いだ。

今、エバはノーツエの後ろにいる。騎馬の上、ノーツエが手綱を握って、後ろに乗るエバがノーツエの腰に手を回していた。それだけでも、ノーツエの緊張は異常だ。今、馬を操っているのが嘘みたいに、身体はかちかちなのだ。

街道から逸れた小道、そこを二人は進んでいる。黒装束の頭にはお札金をもうとっくに渡した。依頼は、三戦士一行を混乱させること、上手くいくならフローと三戦士を別れさせること。作戦は全てノーツエが立てた。実際には動かない。運動は苦手だからだ。それに、闘うには不向きである。包丁すら握ったことがない。だけれど、その代わりにこの頭脳がある。この頭脳は、エバのために役立つべくあるのだと、ノーツエは思っていた。そして、役に立った。これ以上の至福はない。なのに――

（ああ、神があるとしたら感謝したい。役に立てただけでなく、私は今、エバ様とこうして二人



でいることができるのだから)

科学者であるノーツエは、神が続べる世界にいながら神の存在を信じてはいない。いや、この世界の人々はそもそも信心深くない。崇めるべきは神ではなく王なのだ。王に願い請えば、それはすべて神に聞いてもらえたも同然である。見たこともない神に祈るより、目の前にいる王に訴える。それが普通にまかり通る世界だから、人は神を崇めない。信じるものは自分を救ってくれるかもしれないまやかしの神ではなく、自分を守ってくれる王である。しかしその実、王よりも自分自身を信じている。それが人間である。だが、保身された自分自身が王崩御と共に崩れる。そのとき、人は欺き、裏切る。なんと脆い生き物なのだろう。実際あるものを信じた挙げ句、見えるがままに振り回され、結局は簡単に裏切ることもできるのだから。人間とは、なんと愚かなのだろう。ノーツエはそれを嘆くエバに同調した。

(私は貴女と共にあります。私が信じるものは貴女です。それを貴女が愚かだと嘆いても、揺るぎのない事実なのです)

その、ノーツエが信じるエバが言った。

「さあ、神殺しに参りましょう」

京は今、この上なく幸せを感じていた。

リアンたちとはぐれて一日と半分、たったそれだけの時間で、こんな偶然に巡り会えるなんて誰が思うだろうか。神様がいるとしたら、哀れな僕を見て巡り合わせてくれたに違いない——と信心深い人なら思う。だけれど、京はその偶然の再会を喜んではいても、それ自体が幸せを感じさせる大元ではない。だから、京の感謝の方向は若干ずれている。

「ほんっとーに助かったよ〜」

京は口に沢山食べ物を詰めながら言った。

「喋るか食べるかのどっちかにしろよ……」

「マナーは大事ですよ」

「急いで食べるのは身体に良くないと聞く」

呆れたように言った声と、微笑みながらも諭してくれた声と、京のことを案じているのかわかわらないが彼女なりの誠意のこもった声。一遍に叱られて、京は<sup>ひる</sup>怯むどこか、嬉しそうに頷いた。口の中のものがなくなって、また口を開いた。

「フローは？もう食べないの？」

「もともと少量なのだ。滅多にお腹が空くこともない。そういう体質だ。ケイがお腹空いてることに気付かなかったのは悪い」

雑木林を出てすぐの、街道の脇で四人は焚き火をしながらご飯にありついているのだが、食べているのは専ら京だけだ。何せ、リアンたちとはぐれてから全く食べ物を口にしていなかったのだから。林の中では、ほとんど食べ物が見つからなかったし、食べ物を積んだ馬はいなくなってしまった。京が持っていた荷物も、馬に括り付けていたから、本当に手ぶらだった。北を目指して京とフローは歩き続けた。体力が無くなるのと、空腹が襲うのに、京は絶えきれなくなっていたそのとき、たまたま街道の南側から馬の蹄が地を蹴る音が聞こえたのだ。振り向けば二頭、こちらに向かってくる。最初はリアンとユイファンだと思った。だが、違った。だけどそのうち一人に見覚えがあった。京は思わず声を上げた。

「ロイド…じゃない、ロイ・ド・モルトさん！！」

目深に帽子をかぶった姿は変わらない。その帽子を指でちよい、とつまみ上げて、ロイは前方を見た。

「あつれ？お前、なんでこんなところにいるの？」

京の側でロイは馬を止め、京は立て板に水のごとく、今までの事情を喋った。その間中、ロイは口を挟まなかったが、話し終わるとロイは帽子を取って、ぱつが悪そうに頭を搔いた。

「やっぱ、あれは親父だったか」

ロイの言う親父はダルトのことだというのは、すでにわかっていた。

モルト家のことは王都で聞いたのだ。現モルト家当主のシルージャ、その息子ダルト、そしてそのダルトの長男がノーツェ、次男がライラ、長女がライア、末っ子がロイ。すべて千読みのト

ルテに聞いた。トルテが自慢げにロイのことを喋っていたときに。ロイは、歴代の千読みの中で一番の読み手と言われた千読みなのだ。今は、どういう訳か紙芝居を片手に放蕩ほうとうしている。

京はおそらく、次の街へ行く道中だったのだろうと思った。それと同時に、プリムスでのことを思い出した。「次会ったときに何か用意してくれよ」ロイはそう言って、京からお代を取らなかった。今は手ぶら。やっぱり渡すものなんて何一つ無い。だから、こんな頼みをするのも後ろめたかったが、我慢の限界というやつである。

「あ、あのさ、僕、お腹空いてて……」

ロイはキョトンとした後、腹を抱えて大笑いした。

そんな次第で、京は今、およそ二日ぶりのご飯にありついている。

「しかし大変だったなあ。賊に襲われたって？先日、警邏隊けいらたいが各街に派遣されたって聞いてたけど。……まあ、街以外はノーチェックってことか」

「賊もそれを狙ったのでしょう。話を聞いた限りじゃ、ケイさんたちに心当たりはなさそうですし、犯人捜しは難しいですね」

銀髪の男が、ロイに同調するように言った。この男の名を、京はルーファスと聞いた。白い肌に白い服、その上銀髪だから、白一色という見た目である。雰囲気や喋り方、服装なども、この世界の人とはまた違うように見える。不思議な男だ。

「ロイは、これから何処に行くの？」

「ん？……ああ、」ロイはちらりとフローを見た。「ちよいと訳ありで、セイクルまで行こうと思ってな」

セイクル、とは何度か聞いている単語だ。確か、最後の街だと誰かが言っていなかっただろうか。

「お前、何を言っている」

フローが急に険しい声を出した。

「わかってるよ。入っちゃ駄目だって言われたら入らないさ」

戯けたようにロイは肩をすくめた。まるで、冗談だよと言わんばかりに。

しかしフローの険の籠もった声は変わらなかった。

「お前は入れない。許可されていない」

揺るぎない断言。京は確かに城で聞いた。許可されたものしか入れない聖域を。しかしその理由はわからない。フローは何故ここまで頑ななのか。

「じゃあ何か？アンタは許可されてんの？ええっとフローだっけ。姫様付きの喋れない従者って聞いてたけど」

それにフローは顔をしかめて、スカーフを口元まで上げた。それきり、フローは喋ろうとはしない。

「……そういえば、聖域って普通は入れないって聞いたよ」

京は食べながらまた聞いた。

「そうみたいですね。この場合、その『普通』の定義によります。貴方は『普通』じゃないから聖域に入れる。ならば、私もそうです。聖域にはいるのはロイではなく、私なのです。理解し

ていただけましたか、お嬢さん」

ルーファスはフローの機嫌をとるように微笑みかけた。

「……お前は誰だ」

フローはぼそりと呟いた。京は、変な質問だと思った。フローはそもそも喋ることが下手なようである。だから今も、上手く表現できなかつたのだろうかと思った。

だが、ルーファスはそれに答えようと口を開きかけた。

「答えることはないぜ、ルーファス」

ロイが釘を刺すが、それにルーファスは首を振った。

「いえ。事情を聞いた、その判断の上です。私たちの目的地は同じようですから、これから共に行くことになるでしょう。だから、私のことも知っておいていただきたいのです。そう、私は貴女がおっしゃるように『何処』から来た『誰』なのか。これは非常に重要なことなのです」

不思議なことを言う不思議な人だ。京はそう思って、口の中のものを飲み込んだ。食べるのを、暫しやめる。

何故そうしたのか。

それは、ルーファスが真剣な目をしていたからだ。これからルーファスが語ることを、しっかり聞かなければならない。京はそんな気がして、居住まいを正した。

「少し、話は長いですが……」

そう前置きをして、ルーファスは語り出した。

☆

それは今となつては遙か昔のこととなつてしまった。  
目を瞑れば、昨日のこつのように思い出せるのに。  
だけれど、それを知るのは自分一人しか、もういないのだ。

☆

「なんだつてんだあ、ああ?!」

森が切れ、<sup>ようやく ひら</sup>漸く開けた場所に出たと思つたら、<sup>ガラ</sup>柄の悪い声が聞こえた。まだ姿は確認して  
いなかったが、その声だけで、相当威圧感のある男だろうと知れる。ルシファーは、今まで木の  
葉が遮つてくれていた陽の光をまともに受けて、思わず手をかざした。ひさしのように手を添え  
、目を凝らしてやつと、男の姿を見たのだが、どうやらお縄についているようである。開けた場  
所の小高いところ。そこに一本の枯木がある。その木の幹に縄で何重にもくぐられ、<sup>あぐら</sup>胡座を搔  
いて、取り囲む数人の人たちを睨み付けていた。その相貌は険しい。その横で、金髪的女性が必  
至に周囲の人たちに頭を下げています。懇願しているようにも見えた。女性は明らかに、括り付け  
られた男の許しを請うていた。が、女性はいきなり平手打ちを喰らつて、その華奢な身体は地面  
に放られた。

事情はわからずとも、そんな光景を見てルシファーは黙つていられず、その人群に駆け寄つた  
。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

膝を突いて、真つ先に女性へ手を差しのべた。ルシファーは女性鼻根だの女たらしだのと、よ  
く言われるが、本人はレディーファーストの域であると思つている。

「え…ええ、あたしは平気。でも——」

そう言つて女性はその綺麗なグリーンの瞳を縛り付けられた男へと向ける。男は見るからに野  
蛮そうだった。黒髪は高いところで一つにくぐられているが、乱暴にあちこち跳ねているし、無  
精髭も生やしている。目つきも悪い。先程の声と合わせれば、<sup>ゴロツキ</sup>破落戸だと思ふところだ。だけ  
けれど、男の格好が少々、いや、かなりおかしかつた。それがルシファーは気になつた。

ルシファーがまじまじと見つめるのが気になつたらしい。男はルシファーに眼たれた。

「ああ?お前も村の奴らか」

「村?」

ルシファーは聞き返して、周りの人たちを見た。その人たちも<sup>けげん</sup>怪訝そうな目でこちらを見て  
いる。

「なんだあ、白い髪のアンタは何処のモンだ?」

「いえ、まあちよつと…えー、道に迷つてしまひまして」

下手な言い訳だと自分でもわかつていた。相手はますます<sup>いぶか</sup>訝しむ。

「道に迷つたつて、アンタア、今さつき森から出てこなかつたか?」

「え、ええ。そうです。あの森を通り抜けて来ました」

括り付けられた男の言った言葉から推察するに、この男を取り囲む人たちは近くの村の人たちなのだろう。その村人たちは、額を付き合わせるようにして、何やら相談し始めた。何か、まずいことを言っただろうか。ルシファーは緊張した。ただの緊張ではない。少しばかり、どきどきしている。一体これからどうなるのか。それを楽しんでいる自分を内に感じた。

村人たちは、ルシファーを見、そして括り付けた男をあごでしゃくった。

「こいつを連れて帰ってくれ。こいつも森から来たんだ。森の向こう側なんて、この村じゃあ誰も行ったことないから、向こう側に人が住むところがあるなんて思わなかったよ」

「あー俺もこいつが変なこと言うから。盗みを働いた上にイカれやがったかと思ったけどな。今回はこれぐらいで済ましてやるが、次やったらただじゃおかねーぞ」

村人たちは口々に物騒なことを言いながら、男の縄を解いた。その男も殺気立っていて、見ているこっちがはらはらしたが、それを上手くなだめたのは金髪の女性だった。「ありがとうございます。気をつけます」そう言って頭を下げている。下げながら、殺気立つ男に目配せもしているのだから、随分としっかりしている。目配せをちらりと見て、男は縄を解かれたのに座ったまま、口をへの字に結んで黙っていた。この男も馬鹿ではないようだ。

村人たちは、最後にさっさと帰りやがれと言い放って、森とは反対側にある坂道を下っていった。それが充分見えなくなって、女性は溜め息をついた。

「はあ、もう。何考えてるの？喧嘩売ること無いじゃない」

男は立ち上がり、尻のあたりを叩いた。

「ああ？俺から喧嘩売ったんじゃないやねえ。彼奴らが短慮なんだ」

「その前に、畑から作物を盗んだじゃない」

「腹が減ってたんだ」

随分勝手なことを言う男だ、と思った。そしてまた、ルシファーは男の全身を見た。紋付き袴。確かそう呼ばれる着物の一種だったと思う。

「お前、」男が呼びかけた。「村のモンじゃあ無いんだな。どっから来た？」

何処から――

どう言おうかと考えた。だけれど、彼らと自分の境遇は同じなのだと、そう思ってルシファーは逆に問うた。

「あなた方はどうやって此処へ？」

――『何処から』ではなく、『どうやって』。『どうやって』と手段を聞いたからには、徒歩や車といった答が返ってくるものだが、ルシファーが期待している答はそれじゃない。

男は眉間に皺を寄せて、指でぽりぽりと顎を搔いた。

「俺は、八丁堀を<sup>あんどん</sup>行灯 持って歩いてただけなんだが、そこをいきなり辻斬りに襲われてな。腐っても武士。応戦したんだが、多勢に無勢。やられた、死んだと思って、気がついたら森の中だ。もしかして、これが噂に聞くあの世かと思ったが、どうやらそうでもないらしい」

男の言葉に、女性は困った表情をして見せたが、「あたしも」と言って続けた。

「あたしも山で、羊たちを追っていたの。小屋に帰す時間だったから、いつものように鳥と犬

を使って。でも一匹崖の方に逃げちゃった子羊がいて、追っかけたらあたしの方が崖から落ちちゃったの。もちろん、あんな高いところから落ちたら死ぬわ。あたしは落ちてる最中に気絶しちゃって、目を覚ましたら森の中。おかしいな、とは思ったの。いくら山の麓の森に落ちたと言っても、無傷だったんだもの」

面白いくらいに、二人の話は似通っていて、ルシファーは納得したように頷いた。

「ということは、やはり……。しかも意図して来たのではない、と……」

独り言のように呟くと、男は苛々した調子で「お前は？」と聞いてきた。ルシファーはにこりとして答えた。

「私はルシファー・ケンツィベル。科学者です。以後、お見知りおきを」

「そうじゃねえッ！」男は怒鳴った。「お前は どうやってきたんだと聞いたんだ。今、そう言う話をしてただろう。見たところ、村人じゃないみてえだし、そのなりはまた変わってるな。お前も俺たちと同じか？」

「同じと言えば同じでしょう。ただ一点、違うところがあるとすればそれは、私はあなた方と違って、自分の意志でここへ来ました」

「自分の意志で……？」

言っている意味がわからないのだろう。女性は首を傾げた。無理もない。ルシファーは話したところで彼らが全てを理解できるとは思わない。だけれど、説明の義務はあるだろう。だとして、きっと長い付き合いになる。ルシファーはすっと手を出した。

「説明しますが、その前に自己紹介といきませんか？私はもう名乗ったので、あなた方の名前を教えてください」

女性は傾げた首を元に戻した。

「あたしは、ミネルヴァ・ワグ。羊飼いで、特技は動物との意思疎通よ」

「俺は、」男は顎を掻いていた左手を、腰の刀の柄に乗せた。「俺は栄田<sup>じゅうべえ</sup>重兵衛。元は殿に<sup>つか</sup>仕える一介の武士だ」

☆

開いた口がふさがらない、とはまさにこのことだろうか。

京は話に聞き入っていた。まるで、お伽噺を聞いているようだ。いや、語っているのが本人でないならこの話はきつとお伽噺であるのだろう。しかし、本人の口から語られた時点でそれは、実話となる。ロイが語ったのなら、あの紙芝居と同じだ。

聞いているのは、ルシファーが初めてこの世界に来たときの話。

京と同様、やはりあの森から来たようで、話に聞くとところで一点違うのは、当時は霧が深くなかったと言うこと。当時、というのが今から何年前なのか、京にはわからないのだが。

そしてルシファーは森を出たところで出逢ったのだ。違う世界から来たミネルヴァと栄田重兵衛に。

そう、聞き間違いでないのなら、栄田は日本人だ。しかも武士だという。それはつまり、江戸

時代か、それ以前の人物だということになる。

「まさか、あのときは私以外に他世界の人がいるとは思っていなかったもので、驚きましたよ」

ルーファス——それはロイが気を利かせてつけた偽名なので、ルシファーと呼ぶのが良いだろう。ルシファーは昔のことを淡々と、懐かしむように語った。

「あ、あの、」話の腰を折るのはまずい、と思いながらも、京は質問せずにはいられなかった。

「それって何年前の話になるんですか？ルシファーって、ロイの話じゃあ、かなり昔の、この世界の最初の王様が出てきた時代の悪魔の名前じゃないですか。それに、ミネルヴァって、あの森の名前となった女神様の……。これってどうなってるの……？」

頭がこんがらがって、知恵熱が出そうだ。

「話には順序ってモンがあるからなあ。もう少し黙って聞け」

「いえ、私の話が下手なのですよ。ロイほど、話し上手な人はそうそういませんから。でも、そうですねえ。ケイ、最初の王様の名前は聞いたことありますか？」

「えっと……確か、エイダって……」

そう言ったところで、京はあっと大きな声を出した。ルシファーが微笑む。

「そうです。栄田重兵衛、彼がまさに初代王エイダなのですよ」

それじゃあ、それじゃあ、と益々混乱する京に、もう少し話しましょうか、と言ってルシファーは続けた。



ルシファーは元いた世界では科学者としてそれなりに名が知られていた。

ただし、良い知られ方ではない。何故なら、彼の研究対象が周囲の人にはなかなか認知されにくく、同じ科学者であったとしても、彼を<sup>さげす</sup>蔑む者は多かった。

『何を夢見ているんだ』

『理論としちゃ、矛盾はなさそうだが、現実問題として不可能だろう』

『何故、そんな非生産的なことに執心できるのか、わからんね』

『無理だ、できやしない。考えればわかるだろう』

『頭がおかしいんじゃないか』

そんな言葉は聞き飽きていた。世迷い事だの、子どもの夢だの、どう言われようが構わない。やることはただ一つ。実験を成功させることだ。理論は実験によって証明され、確立する。その為<sup>ごうまん</sup>に自分はいるのだと、傲慢な考えだが、ルシファーはそう信じていた。

ルシファーの研究対象は、『多重空間』である。

世界は一つではないという、パラレルワールドの考えを証明するために彼は日夜研究していた。タイムマシンというものがあつたら、という考えを人々が持ち出した頃からあつた仮説の一つだ。もし過去を変えたら未来は変わるのか、という命題に対する答の一つに、“過去”が変わつたらそれは“今”に繋がらず、別の“未来”になる。つまり、時空は枝分かれするという考え方だ。別の考え方には、“未来”はすでに変わらないもとと決まっている、としたものもある。それこそ夢のない考え方だと、ルシファーは思う。“過去”がどうかかわろうとも行き着く先は一つだなんて、まるでこの世には神がおわして、すべてを決めている、と言っているようなものだ。だとしたら、自分が今こうして研究しているのも、神の遊びの一つになりはしないか。そう思っただけで、総毛が立つような嫌悪感に襲われる。

私は違う。

自分の意志で研究をしているのだ。

今やっていることには意味がある！未来に繋がることなのだ——！

若いから、と先輩研究者には良く笑われる。笑っていればいい、と思う。そうやって笑って、実は自分が笑うように、神に仕組まれてると気付いていないのなら滑稽だ。そんな奴こそ、何も気付いちゃいない。視野が<sup>きょうりょう</sup>狭量だと、この人物の未来もきっと狭量だろう。研究も、ある程度で頭打ちだ。

<sup>はた</sup>端から見たら、本当に若気の至りで、未来がある、自分には何でもできると信じ切っていた時代でもあつた。だけれど、真剣だった。それは今でも誓って言える。真剣だった。浅はかかも知れないが。自分自身を信じ切って、狂ったように研究を進めていた。『多重空間』は絶対にあると信じて。

そもそも、空間を時代に操る研究自体は進められていた。小質量物体なら空間転移が可能であることは実証済みだ。それをミクロからマクロに発展させることが、この分野での一番の難所である

ある。

そのような空間の研究は進むが、『時空』の研究は今ひとつだった。タイムマシンに憧れる人は多いが、時間は普遍的な者という概念がすっかり見に染みついているから、それをあえて壊そうとする輩はいなかった。

別に壊す必要はない。

ルシファーは、枝分かれ説を支持していたが、その一方で別の考え方ももっていた。

枝分かれする木は一本ではない。

そう、他にも世界が沢山あり、今いるこの世界、この時間は大きな森の中の本の木、その枝葉に過ぎない。だとしたら、過去を変えることで今が変わってしまうことを恐れるのなら、他世界の存在を証明することで『時空』の研究に劇的な進展を与えられないだろうか。ルシファーの研究は、そういった考えから始まった。

ルシファーはそれを『世界鎖』と呼んだ。木という概念がそぐわない気がしたからだ。だからといって、鎖というのも変かも知れないが、いくつもの輪っかが重なり、絡み合う様は、幾重にも世界があり、相互にそれが影響を及ぼすというイメージと合っているように思えた。これは単なるイメージで、もっと本質を厳密に表現するならば海や雲という単語の方が合っているかもしれない。だれけれど、ルシファーは『世界鎖』という言葉が好きで使った。

そして、鎖は複数あって相互作用を及ぼすのだとするならば、その影響は世界鎖間の距離が変数としての数式が成り立って然<sup>しか</sup>るべきである。それを理論的に、相対論の観点から導き出した。これがあっているか、証明するのは実験のみである。ルシファーは早速実験に取りかかった。その為の資金集めも今までコツコツしてきたのだ。借金も勿論したが、そんなことは気にしなかった。周囲に笑われ、馬鹿にされつつも、研究に勤しんだ彼は、ついに世界鎖を繋げる装置を完成させた。その最初の被験体に自分の身体を使って。

異世界に来たルシファーは心躍っていた。

やった。遂に来たんだ！

私は正しかった――。

森を出たときにルシファーはそう確信した。しかし驚いたことに、自分以外にも他世界からの来訪者がいた。話を聞く限り、意図して来たようではない。となると、ルシファーが世界間を移動したときに、他の世界をいくらか巻き込んだことになる。そういう相互作用は想定内だった。しかし彼の誤算は、試験を逸るあまり、彼自身が準備を怠っていたことである。彼はほとんど手ぶらでこの世界へ来てしまった。つまり、彼は実験を成功させつつも帰れないのである。だが、彼の成功は認知されずとも、彼自身が正しいと言うことを知っているだけで充分だった。ルシファーはそれで満足していた。余生をこの世界で過ごすのも悪くはなさそうだった。見たところ、人はいるし、言葉も通じている。

――言葉が通じている？！

そのことに思い至って、ルシファーは蠟人形のごとく固まった。

どうということだろう。異世界の違う惑星に同じような生態系がいるとしても、言葉が通じるというのは考えにくい。一体これはどういうことか。

ルシファーは栄田を見なければ、時代を遡っただけと考えただろう。しかし目の前にいる栄田は異国人だ。そう、彼の認識が正しいなら、昔の日本人なのだ。ルシファーはその偶然にも驚いている。時代は違えど、同じ世界からこちらに来たと言うことになるのだから。

ルシファーは実はヨーロッパの生まれで、親の影響を受けて親日家を称しているのだ。特に、サムライには興味がある。そしてそのサムライが目の前にいる。

疑問を感じる場所は多々あるが、ルシファーはこの世界に興味を持っていた。まだまだ発展途上の国のようなのである。他にどういう国があって、どういう世界なのか。それをしっかり見極めなければ、異世界に来た意味がない。ルシファーはこの世界を旅するつもりだった。正直言うと、一人では心細い。この二人、栄田とミネルヴァはどうするのだろうか。誘えば来るのだろうか。そんな軽い気持ちでルシファーは言った。

「とりあえず、一緒に旅をしませんか？」

異論はなかった。こうして三人の旅は始まった。

「てえことは、信じがたいが、ここは天下のお江戸どころか、日ノ本ですらねえってことだな」

信じられないと口では言うが、納得したように栄田が言った。

「ジューベイは結構あっさりとな納得するのね。あたしはよくわかんない」

「まあ、望んで来た私自身、わからないことは結構ありますから。いきなり異世界に来たと言って、こうすんなり受け入れているだけ、ミネルヴァも充分柔軟性があると思いますよ」

女性をこう擁護するのだけは何処に行っても忘れないルシファーである。

「柔軟性って言えば、聞こえは良いけどねえ。ジューベイのは、そんなんじゃないよおきつと。わかってないのがわからないくらい、お馬鹿なの」

会ってまだ一日も経っていないのはルシファーだけで、二人はどうやら会って一日は経つようである。話を聞く限り、この世界に来たのは栄田が一番最初だったようだ。ほぼ一日、森を彷徨い、偶然か必然か、ミネルヴァに会って森を出たのだという。そして腹を空かせた栄田は、村の畑から作物を拝借した。というわけである。聞いた話を整理すると、三人はほぼ一日おきにこの世界に来たことになる。このタイムラグも、何かの作用だろうか。ルシファーはそのことを頭に留めておいた。

一日といえど、共に森を抜け、村人に捕まった災難をくぐり抜けただけあって、二人の親密度はルシファーより一歩先に行っている。たった三人の異世界人同士なのだ。仲間はたったこれだけ。仲良くなるのは道理だろう。ミネルヴァのお馬鹿発言から一通りの口論を終えて、栄田はルシファーに向かっていった。

「ルシファーとかミネルヴァとか…なんか、発音しにくい変わった名前だな」

「ジューベイだって、充分変わってますよ」

「そうかあ？」

「変わってるって言うより、変」

「ミネルヴァに言われたかねえ。……その名前、渾名とか無いのか」

確かに、栄田はミネルヴァの発音が難しそうで、ヴァが曖昧だ。ミネルヴァ自身も気になっていたのだろう。さんざん言い合った挙げ句、「ミル」に落ち着いた。

言い合いながら歩く内、下り坂になった。その先に集落が見える。栄田が作物を盗ったという村だろう。栄田は露骨に嫌な顔をした。

「あそこは避けようぜ」

「そうですね……」ルシファーとしては馬が借りれるなら借りたいところだった。徒歩で回るのは体力的にもキツイし時間が掛かる。それに、次の街の方角や時間も聞かねばならない。「では、私はまだ顔がそんなに知られていないでしょうから、村で次の街までの道のりを聞いてきます。ちょっと待っていて下さい」

そうやってルシファーが行った村はアル村という名で、村人はみな農作そして質素に暮らしていた。他の街との交流がほとんど無いのか、要領を得なかったが、川沿いに歩いて三日もすれば街に出ることがわかった。村に馬はいなかったのも、その徒歩三日は我慢だ。ついでに食料も貰いたかったが、栄田の狼藉が効いているのだろう。それは叶わなかった。旅は困難を極めそうだ、と思うと同時にルシファーは今までにないくらい、気分が高ぶっていたのもまた事実だった。科学者としての探求心がそうさせるのか、自分自身でもわからなかった。

## ☆

ルシファーは遠くを見つめたまま言った。

「とにかく、あの時は有頂天になってました。科学者としての生涯をすべてあの研究に捧げていましたからね。異世界に紛れ込んだ後どうなろうと構わない。そう思っていたくらいに、私は私自身に溺れていました。それに、未開発の国のようでしたから、この国の謎をまた解明するのは私だという確信も持っていました」

「国……ですか？」

京は訊ねた。こちらに来てからずっと、クレイドルという名は国の名ではなく世界の名だと聞いていた。その所為か、自然とこの世界は国が一つの、だからこそ争いのない世界だと思い込んでいた。しかしよく考えれば、一つの世界に複数の国があるのはごく自然なことである。

「私は初め、此処を国だと思っていました。しかし、旅をする内にこの世界は国という<sup>てい</sup><sub>な</sub>態を為していないことに気がきました。小さな自治体はありましたが、それだけです。社会の仕組みができていく中で、国がないことほど不思議なことはありません。大なり小なり、指導者がいてもおかしくはない。私はその指導者に会って見たかったのですが、行けども行けども、そのような方はいませんでした」

「え……でも、」京は逸る気持ちを抑えながら、ルシファーに聞いた。「神様に会ったんじゃないの？」

ルシファーはそこでゆっくりと微笑んだ。肯定なのか、否定なのかわからない。

「貴方は今、神に会いに行く旅の途中なのですね」京が頷くのを見て、続けた。「でしたら自分

の目で確かめなさない。私が今、どうこう言うより、それが一番良いでしょう」

なんだか狡い、と京は思った。答を知っていて教えてくれないのだから。

ルシファーはまるで、これから何が起こるのかもすでにお見通しのように見える。それこそ神に等しい存在では無かろうか。

京のそんな思いが表情に出たのだろう。

「そう言えば、私が何故、今になってまたこの世界に来たのかという肝心なことをお話ししてませんでしたね」

その言葉に反応したのはフローだった。今まで体育座りをして、その膝に顔を埋めていたが、顔を上げてルシファーを見る。早く話せと言わんばかりの双眸だ。

「少々話を省きますが、」そうは言うが、フローにとって今までの前座は長かったことだろう。

「私はこの世界を旅して、最後には帰ることを決意しました。帰れると聞いたことと、私の研究が不完全だと気付いたからです。ジューベイとミネルヴァは別れを惜しんでくれました。彼らは残る選択をしたのです。ミネルヴァは特に、泣き喚いて大変でした。また必ず会いに来るから。そう言って、私は帰ったのです。しかし一方で、私はもう二度と会えないだろうと言うことを予測していました。非道いですね。それがわかっていて、私は彼らに残酷なことを言ったのですから……」

最後は半ば、自嘲気味に言った。そして大きく息を吸うと、ルシファーは笑顔のまま、こう言った。

「だから、私を“悪魔”と評するのは至極正しいことなのですよ」